

## テーマ 「英語科における豊かな学びの創造 ～CALLとAuthentic Material の活用 PART 2～」

### I はじめに

先に全体総論の中で述べられているように、本校では「豊かな学び」の実現のために、子どもたちの学習のあり方を、

- ①学習のねらい－「個性を拓く学び」・「社会につなぐ学び」・「世界と結ぶ学び」
- ②学習の方法－「習得サイクル」と「探究サイクル」
- ③学習効果を高めるために－「個の学びと集団の学び」

という3つの視点で捉えた。先ず、それぞれの視点と英語教育との関わりについて述べてみたい。

#### 1. 「個性を拓く学び」・「社会につなぐ学び」・「世界と結ぶ学び」

英語科における「個性を拓く学び」・「社会につなぐ学び」・「世界と結ぶ学び」という3つの学びの具体的な内容は次のような学びであると考える。

##### ① 個性を拓く学び

基礎的な英語の語彙や文法を習得し、その土台の上に英語を使って自分の意見や主張を主体的に述べる事が出来る基礎的な力を培う学び

##### ② 社会につなぐ学び

地域社会の一員、あるいは日本人としての共通の規範意識を身につけ、自分の生まれた町や自国の文化について理解を深め、誇りを持ち、英語を使って自分の意見や主張を発信していけるようになるための基礎的な知識・技能・資質等を培う学び

##### ③ 世界と結ぶ学び

日本人としての強い自覚を持って、国際社会で他国の人たちと協調しながらも、堂々と自分の意見や主張を述べられるようになるための基礎的な知識・技能・資質等を培う学び

#### 2. 「習得サイクル」と「探究サイクル」

習得サイクルにおいては、英語による実践的コミュニケーション能力の土台となる語彙や文法等を徹底的に教え込むことが大切であると考え。そのためにはパターン練習や繰り返しのドリル学習が欠かせない。陰山英男氏の実践で有名になった100ます計算は、賛否両論はあるが、「徹底的に教え込む」ということが希薄になりつつある現在の学校教育に警鐘を鳴らした功績は大きいと思う。

しかしながら、まったく意味が分からないのに闇雲に繰り返し練習をさせることは意味がない。意味のわからないアラビア語をたとえ100万回聞かされ口まねしたとしてもアラビア語を理解できるようにはならないのは当然のことである。特に第二言語としてではなく、外国語として英語を学習する我々日本人にとっては、英語の文字、語彙、文法等の体系的な知識を身につけることが重要であり、それらの理解を前提としたパターン練習や繰り返しドリルが行われねばならない。

ただ、繰り返し練習はおもしろくなく、すぐに飽きてしまい、何のための基礎練習かが分からないままでは、結局のところほとんど何も身に付かず、かえって非効率的な学習方法であると言わざるを得ない。繰り返し練習を有効なものとするためには、その必要性を理解させるとともに、マルチメディアの

利用も含め、多様な手法を用い、ゲーム的な要素等も加えながら、「変化のある繰り返し」を工夫する必要があるだろう。

習得サイクルにおいては語彙や文法などの基礎・基本を身につけさせることが中心となる。しかしながら、基礎・基本は基礎・基本の練習だけを行ってれば身に付くというものではない。大工仕事に例えれば、ノコギリや釘打ちの技術だけを繰り返し練習していても、家を建てられるようにはならない。その技術を使って実際に家を建てる仕事をしてこそ、初めてその基礎技術の意味が分かり、真に生きて働くものとなり、実際に使えるものとなる。また実際に家を建てることにより、さらに基礎的な技術を向上させるための課題が見え、意欲的にその技術を磨こうとする姿勢が培われるのである。

探究サイクルで取り組むべき課題はここにある。コミュニケーションの基礎となる語彙や文法の知識を身につけ、「聞く・話す・読む・書く」の四技能を用いて、実際のコミュニケーションの中でそれらを使用させなければならない。インフォメーションギャップ等を用いた種々のコミュニケーション活動や、インターネットや電子メール等を活用した外国の人々との交流、あるいはフェイス・ツー・フェイスでの外国の人たちとの交流活動等、英語の授業だけではなく、様々な機会を捉えて英語を使わせるチャンス子どもたちに提供する必要がある。

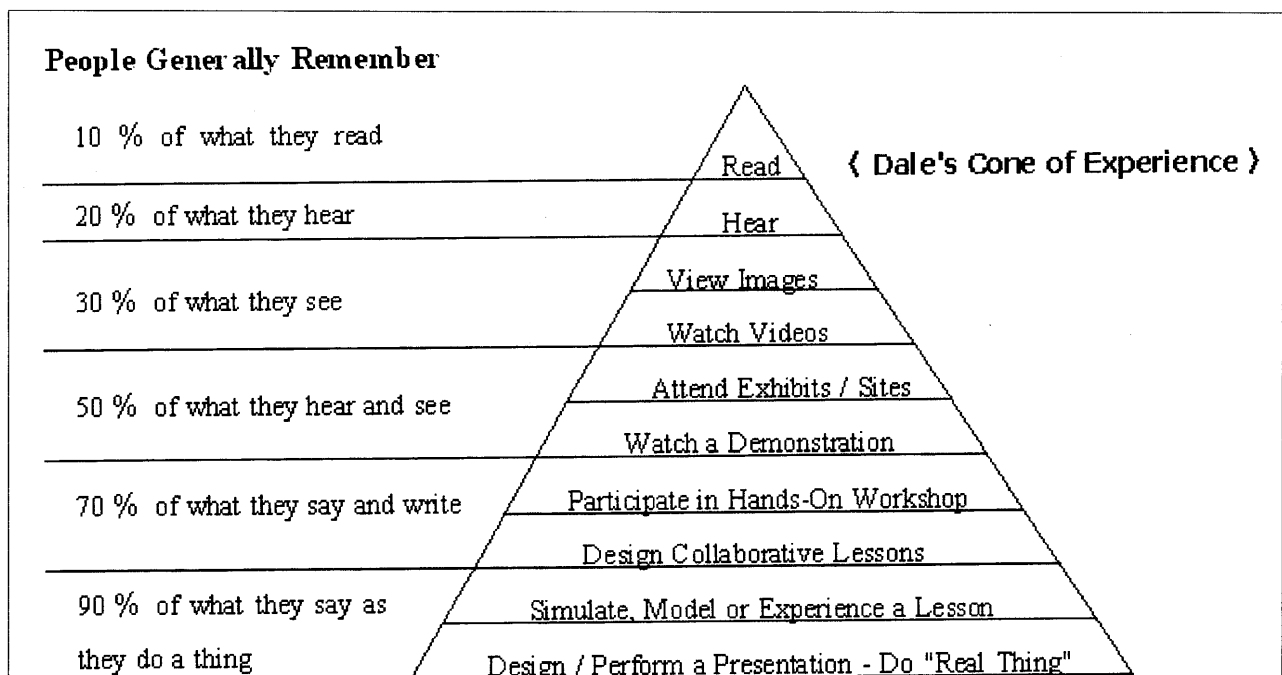
### 3. 個の学びと集団の学び

学びとは個々人の内部に成立するものである。生徒に学力が身についたという場合は、個々の生徒に一定の知識や技能や資質が身についたということを意味する。その意味では、学習とは極めて個人的な営みであると言える。しかしながら、その学習を成立させるプロセスにおいて、他者と競争したり、他者と知識や技能を共有したり、物の考え方などをすり合わせたりといった集団による学びを取り入れることは学習効果を高めるために非常に有効であるし、コミュニケーション能力など、集団による学びなくしては身につけられない能力もある。学校という場で集団で学ぶということは、単に教育の効率を求めることだけが目的ではなく、集団による学びが個人の学びよりも優れている部分があるからである。そのことを我々は再確認する必要がある。

競争か協力か、というような二者択一の考え方はあまり有益ではない。時と場合によって競争させたり協力させたり、いろいろな方法を導入することが重要であろう。しかしながら昨今あまりにも「競争」の方に振り子の針が傾きすぎているように感じられてならない。せめて同じ学級の仲間とは、競争ではなく協力や協同が中心の学習が実現される環境を構築してやる必要があるのではないだろうか。特に英語科では、英語を用いた実践的コミュニケーションの力を身につけ、英語を使って「社会につながる」「世界と結ぶ」人材の育成が求められている。ペアやグループによる協同的な学習を抜きにしては英語教育は語れない。

## II 研究主題設定の理由

エドガー・デールは、“Cone of Experience（経験の円錐）”（下図）で、人間の認知能力というのは、抽象性の高い言語によるよりも、直接的・具体的な経験や体験による方が、その能力が獲得されやすいと論じた。つまり教育というのは、文字や言葉だけではなく、さまざまな体験的活動や多様な教材を活用することで、よりその効果が高められる。Cone of Experience を上下しながら、次第に概念や思考が練られ、学習がより豊かになっていくのである。



(\*<http://www.compstrategies.com/staffdevelopment/4cueadlearn/sld001.htm>から引用)

母親は、我が子にお弁当を作るとき、いかにして子どもの食欲をそそり、必要十分な栄養を身につけさせることができるのかを考えながら調理に当たる。いくら良い材料を用いて調理しても子どもが食べてくれないならば意味がない。見た目、香り、味付け、様々な要素で子どもの食欲をそそる工夫を行おうとするだろう。教科書とチョークだけでも授業はできる。それだけで素晴らしい授業をされている先生方も数多く存在することも事実である。しかしながら、そこにひと工夫を加えることで、さらに子どもたちの興味や関心を高め、意欲を引き出し、学習効果を高めることが期待できる。英語科では、例えば新出単語の提示を行うとき「フラッシュカード」を、教科書本文のシチュエーションを理解させるために「ピクチャーカード」を、新出文型の提示を行うときには「短冊黒板」を、教科書の音声聞かせるときには「CDプレーヤー」を、また時には、教科書のスキットの状況を理解させるために「DVDプレーヤー」を、という具合に様々な教材・教具を用いて生徒の興味・関心を引き出す工夫を重ねてきた。それがコンピュータの出現により状況が大きく変わりつつある。コンピュータはそれらのすべての教材・教具の機能を一挙に満たしてくれる優れたものである。静止画や動画、音声等のほとんどすべてのメディアを扱うことができ、しかも保存、修正が簡単にできるという利点がある。これを授業で利用しない手はないのではないだろうか。

上記のような理由で、英語科における「豊かな学び」を実現するための一つの方策として、CALL や Authentic Material を活用した授業のあり方を平成18～20年度の研究テーマとして設定した。

### Ⅲ 昨年度の取り組みの概要

昨年度は「豊かな学び」の実現のために『英語科における豊かな学びの創造～CALLとAuthentic Materialの活用 PART1～』という主題で、特に CALL 教室におけるCALLシステムの活用と、電子メールや普通郵便の利用、留学生との交流等のオーセンティックな教材の開発と活用について研究を行った。以下はその概要である。

## 1. CALL 教室における CALL システムの活用について

### (1) ノート P C とプロジェクターによる授業支援

- ・黒板&チョークとはひと味違う活用方法が考えられる効果的な教具の一つであることが確認できた。黒板&チョークとノート P C & プロジェクターのそれぞれの長所をうまく併用した授業展開を追究していく必要がある。
- ・C A L L 教室だけではなく、すべての普通教室でノート P C とプロジェクターが使用できるような環境作りに学校あげて取り組んでいく必要がある。

### (2) ブラウザベースの英語学習自主教材（“Hot Potatoes” による）の活用

- ・単調になりがちな文法や語彙の繰り返し学習に、より意欲的に取り組ませるのに大きな効果を見ることができた。
- ・Hot Potatoes は慣れればだれでも扱えるソフトウェアであるが、今のところすべての英語教員が使えるようにはなっていない。イントラネットの基礎知識とともに今後研修を行っていく必要がある。

### (3) ウェブサイト “Quia Web” の利用

- ・指導者の労力の軽減に大いに役立った。
- ・テスト内容については、単語だけではなく、さらに様々な内容が工夫できるように思う。今後の研究が必要である。
- ・時々、ネットワークが不安定になり、採点がうまく行われないうちがある。また、P C 操作に不慣れなために思うような成績がとれない生徒も見受けられる。改良が求められる。

### (4) CAI (Computer Assisted Instruction) 機能による授業支援

- ・画面転送機能については、プロジェクターでは見えないような文字や画像を生徒に見せたいときにとっても役に立った。印刷物では配付にかかる時間がこの機能により削減できる。
- ・文書ファイルの回収機能については、印刷物の方が便利であると感じた。何か別の活用方法が望まれる。
- ・スピーチやリーディングの音声ファイル回収機能は、テスト実施にかかる時間を大幅に短縮できた。ただ、面接によるテストではないので、現在のところ、スピーキング能力の評価には使えそうにないと感じている。より効果的な使用方法の研究開発が望まれる。

## 2. Authentic Material の活用について

### (1) 留学生を活用した交流活動－和歌山大学の留学生との校外学習－

- ・様々な国籍の人たちと行動をともにすることによる異文化理解を効果的に行うことができた。
- ・英語圏の人たちだけではないので、英語が世界の人たちとのコミュニケーションの道具であることを再確認させることができた。
- ・留学生への指導が徹底できていなかったために、グループによっては留学生が伝わりやすい日本語を用いてコミュニケーションを行ってしまうということがあった。
- ・初年度ということで交流センターを通しての事務手続きに労力を要したが、日程を組み替えれば留学生や交流センターなどの大学側にも意義ある活動であった。（大学側は留学生に日本文化を体験させるような活動を積極的に取り入れている。）

## (2) A L Tの積極的な活用－A L T単独の英会話授業－

- ・子どもたちは興味を持って学習に取り組んでいる。
- ・学習内容について、J T Eとの打ち合わせをもう少し念入りに行っていく必要を感じている。

## (3) 電子メールやホームページを利用した交流活動－外国の学校の生徒との交流－

- ・2、3年生合同の選択授業クラスで epals.com を利用してオーストラリアやニュージーランドの子どもたちと電子メールの交換を行った。
- ・本物のコミュニケーション活動を通じて、子どもたちの英語学習に対する意欲を高めることができた。今後もさらに発展させていきたい。

## (4) 普通郵便を利用した交流活動－有名人にファンレター－

- ・およそ8割強の返信があり、海外の有名人からのサイン入り写真を手に入れることができ、書くことへの意欲を高めることにつながった。「次は〇〇に書きたい。」「お礼の手紙を書きたい。」など意欲的な意見が多く出た。
- ・炭疽菌騒動以来、有名人へのファンレターチェックが厳しくなり、宛先を調べるのに大変な労力を費やさなければならなかった。また一度調べたからといって、次回も同じアドレスで届くとは限らず、その都度調べなければならないという面倒が伴う。

## (5) 英語の歌－英語の聞き取り練習（Hot Potatoes を活用した英語の歌の聞き取りプログラム）－

- ・英語の歌を楽しみながらリスニング能力が向上していると感じている。何よりも、生徒たちが「聞かされる」のではなく、自らの興味・関心に応じて、「聞きたい」という活動になっていることがこの活動の最大のメリットである。

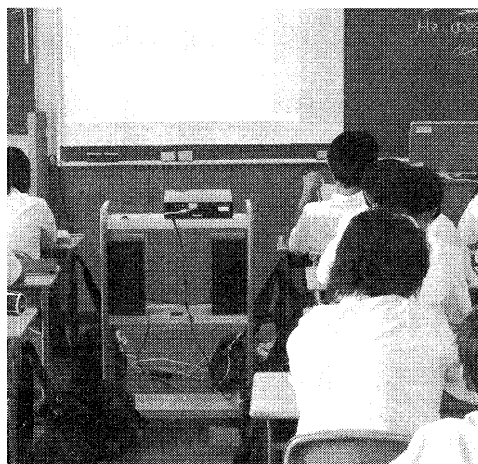
# IV 今年度の取り組みの重点

昨年度は、習得サイクルと探究サイクルのうち、どちらかと言えば、探究サイクルに重きを置いた取り組みを行ってきた。今年度は昨年度の取り組みで成果のあったものを継続させるとともに、特に「変化のある繰り返し」を意識しながら、習得サイクルに重きを置き、CALLをうまく活用することにより「基礎・基本」の徹底をどう図るかということについて研究を進めたいと考えている。また、学習効果を高めるために、協同学習的手法を取り入れた学習活動にも積極的に取り組んでいきたい。

## 1. CALLの活用

### (1) 普通教室におけるCALLの可能性

約3年間のCALL教室における授業において、CALLシステムの有効性が確認できたが、課題として、教室がゆったりしていて良い反面、人と人との生のコミュニケーションにとってはそれが弱点となる場面も見られた。特に生徒が発言するときなどは、マイクを使わないと他の生徒に声が届きにくい。その弱点を克服し、かつCALLの良さを生かすために、今年度は「簡易CALL装置」（通称「コロコロ」）を活用した、普通教室におけるCALLの可能性を追究している。



具体的には左のような、ノートパソコン、プロジェクター、小型スピーカー、携帯用スクリーンのセットを用意し、授業教室にそれ運び込んで授業を行っている。かつては高価で手が出にくかったプロジェクターやノートパソコンも価格が下がり、今では比較的手軽に手に入れられるようになってきた。今年度、本校にきた教育実習生たちにもこの装置を使わせてみたが、さすがにコンピュータの操作には手慣れており、こちらが期待する以上の教材を作ってみせてくれた。「これは一度使うと手放せないですね。将来教師になったら、自費でも購入して使ってみたい。」というのが多くの実習生たちの感想であった。今年度は、主に Microsoft Powerpoint を用いたスライド作成とその利用方法、及び Windows Media Player 等を活用したビデオクリップの作成とその利用方法に焦点を当てて取り組んでいる。著作権の問題も含め、スライドや動画の効果的な活用場面や方法の可能性を研究していきたい。

## (2) CALL システムの発展的活用

CALL教室での授業の可能性についても新たな可能性を追究したい。本校に導入されているシステムについては、操作が煩雑に見えて、未だ使われていない機能も存在している。宝の持ち腐れに終わらせないためにも、それらの機能の活用にもチャレンジし、新たな可能性を見いだしたいと考えている。

## 2. 協同学習的手法の導入

本校がニュージーランドへの語学研修を実施して今年で2年目になるが、ニュージーランドの学校における授業風景でいくつか印象的なことがある。

一つは、多くの先生方が決して大きな声を出さず、囁くような小声で授業をされていることである。一般的には、外国の子どもたちは自己主張が強く、活発に自分の意見を主張し合うような授業が想像されがちであるが、自分の意見を主張する前に、先ず相手の意見を聞くこと、そのことがまず大事にされている。

二つめは、随所にグループ学習を取り入れていることである。それも5人とか6人とかの人数ではなく、最大4人までの少人数グループによる授業である。左の



写真は、ある日本語クラスの授業風景であるが、4人ひと組のグループになり、絵カードを用いて単語の学習をしていた。

この少人数グループによる学習方法は、英語では Co-operative Learning、日本語では「協同学習」あるいは「協力学習」と呼ばれているが、この学習方法は、今世界中で静かに、しかし着実に、一つの大きな教育の潮流となりつつある学習方法であるという。本校においても、今年度は他者との関わりを大切に、知識やものの考え方を共有し合う

中で学習効果を高めようという取り組みを行っている。そのために、学年によって取り組み方の違いはあるが、場面に応じて少人数グループを用いた学習活動を意図的に取り入れるような授業展開を試みている。今までも、もちろん時と場合に応じてグループ学習を取り入れてはきたが、それらは特に「協同」ということを意識したものではなく、ましてや理論的なバックボーンに支えられた取り組みではなかった。本年度始まった私たちのこの取り組みも緒に就いたばかりであり、確かな協同学習の理論に則った活動になっているわけではない。第一、協同学習の理論の学習さえ満足に出来ていない状況ではあるが、

学習を重ねながら、少しずつ、より効果的な協同学習の手法の導入を試みていきたいと考えている。

「実践的コミュニケーション能力」の獲得をねらいとする英語学習においては、ペアやグループによる学習を避けて通ることは許されない。実際にコミュニケーションをさせることでコミュニケーション能力は養われるのである。学年が進むにつれて、だんだんとペアやグループによる活動が困難になっていく傾向があるが、中学校3年間を見通したペアやグループによる学習習慣の形成を意図した授業の組み立てを、教科レベルにとどまらず、学年レベルでも計画的に考えていく必要があるかと思う。

### 3. 新カリキュラムについて

英語科の学習は、もともとじっくりと時間をかけて考えさせるような場面は比較的少なく、学習効果を高めるために短時間の練習をできるだけ多く繰り返させることがより重要であることが多い。その意味では、今回の英語の授業時数増は英語科としての長年の願いが叶ったと言うことができる。語彙や文法等の基礎・基本をもとにして、それらを用いた実際のコミュニケーション活動の実施にかけられる時間の余裕ができ、今後「実践的コミュニケーション能力」を今まで以上に伸ばせることが期待される。

## V 成果と課題

### 1. 普通教室における CALL の可能性

#### (1) 簡易 CALL 装置（コロコロ）の有効性

今回の研究授業では、英語科の教員3人全員がICT機器を使った授業を試みた。「2005年度を目標に、全ての公立小中高等学校等が、各学級の授業においてコンピュータを活用できる環境の整備を行えるようにする。」としたミレニアムプロジェクトによって進められた普通教室へのコンピュータの導入は、2005年度までにその目的を達せず、普通教室へのコンピュータの設置率は25パーセント弱という貧弱なものにとどまってしまう。他の先進諸国に比べてあまりにもお粗末な数字である。もはや行政の施策を待ってはおれぬ、ということで取り組み始めたのが今回1年生と2年生で行った「簡易CALL装置」（通称『コロコロ』）を用いた英語授業であるが、使っているうちに意外なことに気がついた。当初、私たちは各普通教室にコンピュータとプロジェクターが常設されていて、各教科の先生方が各教科の授業でそれらを活用できるような環境が望ましいと考えていたのだが、日本のように、教師が各教室に移動（美術、音楽などのような特別教室がある場合は別）して授業を行う場合には、常設の方がかえって不便であることが分かったのである。機器を教室にそのまま放っておいても何も心配いらないような健全な環境であれば話は別であるが、多くの場合は教師がその場を離れるときには機器を鍵付きの保管庫に入れるなどして管理することが必要になる。つまり、授業ごとに機器を保管庫から取り出し、使用準備をし、使用後にまた保管庫に片付ける、という面倒な作業を繰り返さなければならない。これは大変面倒なことである。その点、この「コロコロ」を使うと、朝、その日の授業準備をノートPCに仕込んでしまえば、あとはそれを各教室に持って行って電源をONにするだけですむ。極めて簡便である。

#### (2) 習得サイクルとコロコロ

現学習指導要領における反省点の一つは、「自ら学び、自ら考える力」の育成を重視するあまり、基礎・基本の徹底を図るべき「習得サイクル」の学習がおろそかにされてしまったことである。一時期、英語科でも語彙や文法の学習よりも、英語で何かを話させることさえ行えばコミュニケーション能力が養われるということが主張され、授業の大半をコミュニケーション活動ばかりに当てるとい

ような授業形態が多く見られたことがあった。当然のことながら、豊かなコミュニケーションは、確かな語彙や文法の基礎力があってこそ成立するものである。

その基礎・基本をきっちり身につけさせるためには、反復練習が欠かせない。反復練習なしに身につけられる基礎・基本はありえない。1本のヒット、1本のホームランを生み出すためには何千回、何万回というバットの素振りが必要不可欠なのである。ただ、反復練習はつまらない。そのつまらない反復練習に変化を与え、より効果的なものにしてくれるのがこの「コロコロ」であることを私たちは実感している。静止画、音声、動画等の様々なメディアによって、英語授業における「変化のある繰り返し」を可能にしてくれるのである。

### (3) 今後のICT機器の活用について

今回の協議会で司会を担当していただいた先生から次のような感想をいただいた。

「話には聞いていましたが、この簡易CALL装置が実際にどんなものなのか、果たして本当に自分の授業でも使えるのかどうか、実際に授業を見せてもらうまでは実感がわきませんでした。しかし、今回授業を見せてもらって、さっそく私も自分の授業で使ってみたいと感じました。特に私のようなものぐさな者にはぴったりの教具だと思いますよ。」

現在、この先生は海南市の中学校で、空き教室を英語専用教室として使いながら、自作の「コロコロ」を用い、倉庫に眠っていたスクリーンを出してきて、私たち以上に工夫を凝らした英語授業を実践されている。今後も、できるだけ多くの英語の先生方に使ってもらい、その良さを実感していただきたいと思う。

本校でも、この「コロコロ」が他の教科で普及し始めている。何故か？便利だからである。研究協議会当日、本校の授業を参観にこられた、大学で情報教育を担当されている先生が、「附属中学校では、たくさんの先生方がごく自然にICT機器を使われていますね。」という感想を述べておられた。トップダウン方式で、「ともかく使ってみよう」式の普及の仕方もあるだろうが、「便利そうだから使ってみようかな。」式にじわじわと普及されていくことを私たちは最も期待している。来年度はさらにこの「コロコロ」を学校全体でさらに2～3セット追加する計画である。

## 2. CALLシステムの発展的活用

### (1) アナライザー

生徒に出題する問題に対し、選択肢で解答できる画面を生徒のコンピュータに表示させる。生徒は解答をその画面で入力する。

解答結果をリアルタイムに表示させ把握することができる。またデータを集計し、グラフ表示することにより、解答の分布を確認できる。出題→解答→集計の流れがすぐに行えるため、授業中にフィードバックすることも可能である。個別に集計することにより、評価につなげることも容易である。

ただ、慣れるまで教材作成にやや時間がかかることや、コンピュータ上で解答するため、学習というよりはクイズ形式のゲームという感覚になりがちであることが課題である。

### (2) DRILL STUDY

「SPEAKING」や「LISTENING」で学習したことを問題形式で復習ができ、画像付きの問題にも対応したドリル学習ツールである。音声や問題文に対して、選択肢を選んで解答する。

正解が表示され、不明な点は、解説ボタンで解説を見ることができる。また教材ごとに解答を提出することが可能である。問題文の再生スピードは+50%～-50%の範囲で自由に変えることができ、



個々のペースで学習を行うことができる。課題はソフトの特性上、小問ごとに教材作成が必要であるため、とても時間がかかることである。生徒にとっても何度もコンピュータを操作し、問題と呼び出さなければならない。教材作成の段階ではアイデアがどんどん生まれ、有効に活用すれば、さまざまな効果が期待できるツールであるが、さらに改善が必要である。

### (3) SCREEN LESSON

動画を見ながら学習でき、状況を理解した上で、実践的なやりとりができる。また、動画に合わせてながらの音声録音が可能である。

映画やドラマの主人公になりきってせりふを繰り返し練習することにより、会話のやりとりを学習することができる。動画に合わせての練習のため、生徒の「読む」ことの意欲に充分に応えることができるツールであるといえる。しかしこれも DRILL STUDY と同様、小問ごとの教材作成が必要であるため、作成に時間がかかる。工夫次第で活用の幅をどのようにでも広げることができるものであるが、今後さらなる研究が必要である。

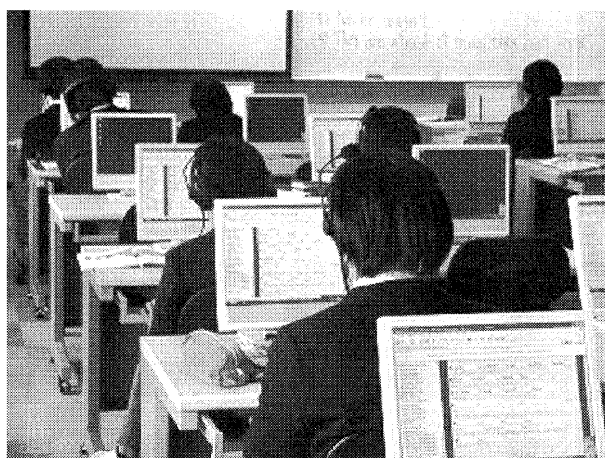
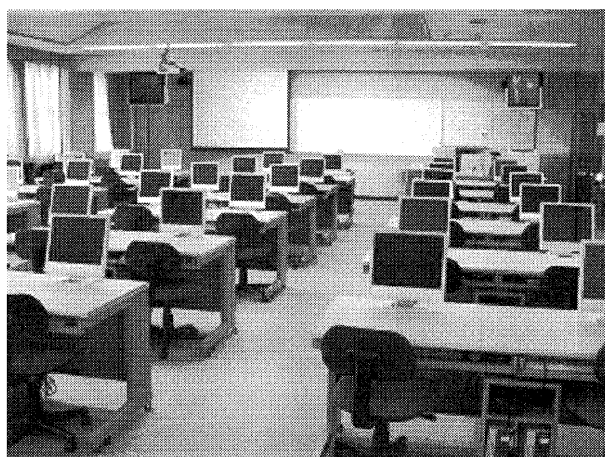
## 3. 協同学習的手法の導入

協同学習が成り立っているかどうかの指標として、私たちは「①ペアやグループの中の一人のメンバーの学習が、他のメンバーにとっても利益となっているか。②ペアやグループで学習することに必然性があるか。」という2つの規準を使って、個々の言語活動を検証しているが、とにかく今は、条件に合うかどうかよりも、英語の授業において、どのようなペア学習やグループ学習が可能であるのかを模索中である、というのが正直なところである。

今回の研究授業でもいくつかの場面で協同学習的手法を試み、そのいくつかは協同学習の成立要件をクリアしていると考えられるが、とにかく確実に言えることは、ペアやグループの学習を取り入れることにより授業が活性化し、効率的になるということである。限られた授業時間の中で、より効果的な授業を行っていくために、今後もさらにどのような活動が可能なのかを追求していきたいと思う。

## VI 参考資料

### (1) 本校 CALL 教室の仕様



#### 〈ハードウェア関連〉

- (a) 生徒用コンピュータ40台
- (b) 指導者用コンピュータ1台
- (c) サーバー機1台
- (d) 制御用コンピュータ1台
- (e) ヘッドセット（マイク付き）41セット
- (f) プレゼン用ノートパソコン1台
- (g) プロジェクター及び天吊り型スクリーン
  - \* プロジェクターはノートパソコン、指導者用PC、DVD、VHSの各プレーヤーに接続
- (h) ワイヤレスマイク2個
- (i) スピーカー4個（教室の4隅に配置）
- (j) MD・DVD・VHS・CD・カセット各プレーヤー
- (k) A3モノクロレーザープリンタ

#### 〈ソフトウェア関連〉

- (a) OS：Windows XP Professional
- (b) Internet Explorer 6
- (c) 環境復元ソフト「瞬快」
- (d) PC@LL DT（内田洋行）

### (2) DVD関連の編集ソフト～Xilisoft DVD Ripper と Windows Media ファイルエディタ～



Windows Media ファイルエディタ

DVDの動画を授業で扱う場合には、DVDプレーヤーやPC付属のDVDドライブを使って再生することができるが、前に戻したり、早送りしたり、あるいは繰り返し再生をしたり、といったことにスピーディーに対応できないという弱点がある。

そのため、授業の流れを切ることなく、効果的に動画を利用するためには、動画をPCで扱えるファイル（WMVやrm等）に変換しておくことが非常に便利である。

今回の授業では、Xilisoft DVD Ripper というソフトを使ってDVDの動画をWindows Media プレーヤー

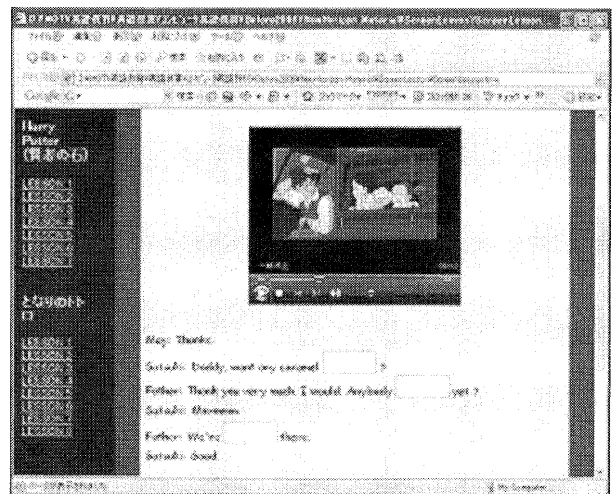
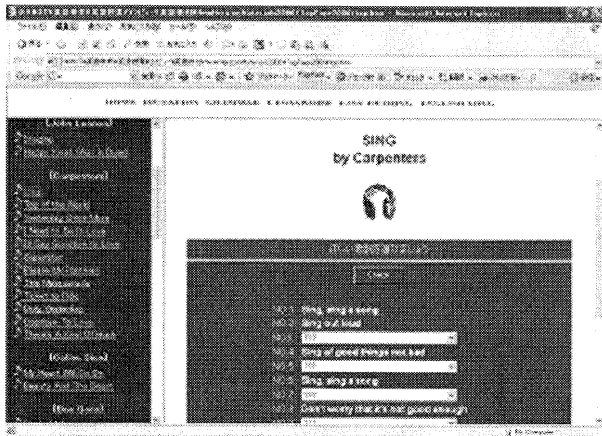
で扱えるWMVという動画形式に変換して利用した。

このソフトはWMVだけではなく、その他様々な形式の動画ファイルにボタン一つで変換できる機能を備えている。

最近では、このソフト以外にもいろいろな動画処理用のソフトが販売されている。

Windows Mediaファイルエディタは、WMV形式の動画ファイルを分割したり結合したりできるソフトで、Microsoft 社が無償で提供しており、ネット上からダウンロードして手に入れることができる。

### (3) 教材作成ソフト Hot Potatoes



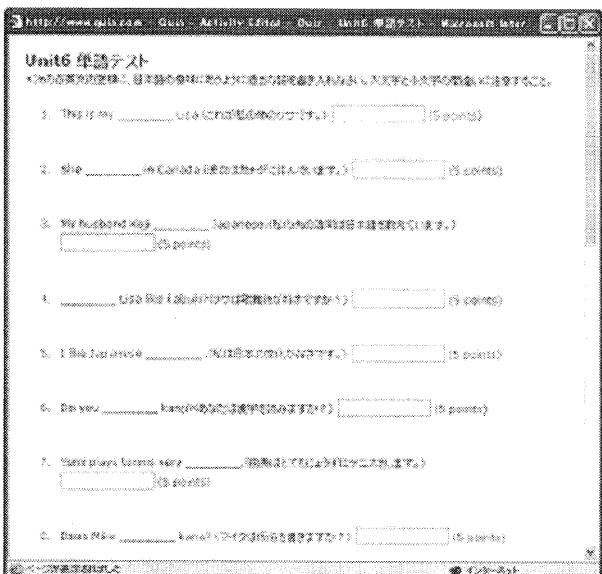
Hot Potatoesとは、カナダのビクトリア大学 (<http://web.uvic.ca/hrd/halfbaked/index.htm>) が教育者のために無償で提供している教材作成ソフトである。

“JCloze” (穴埋め教材)、“JCross” (クロスワードパズル)、“JMatch” (マッチング問題)、“JMix” (並べかえ問題)、“JQuiz” (クイズ) の5種類のブラウザベースの教材作成が可能であり、音声や画像等も自由に組み込むことができる。

左上の教材は、JMatchを利用して作成した英語の歌の聞き取り問題である。生徒はヘッドセットで歌を聞きながら、抜けている歌詞をマウスで選択していく。

右上は、JClozeを利用した映画の台詞の聞き取り練習である。映画の中の適当な場面を切り取り、Media Playerを使って動画を見ながら音声を聞くことができるようにしてある。コンピュータの優れている点は、同じ場面をワンクリックで何度でも見たり聞いたりすることができることである。リスニング能力の向上ためには極めて有効であると思う。

### (4) 教師支援サイト Quia Web



“Quia Web”とは、アメリカのQuia Corporationが提供する教員の業務支援のためのサイトである。

特に語学に特化したものではなく、様々な教科での利用が可能となっている。

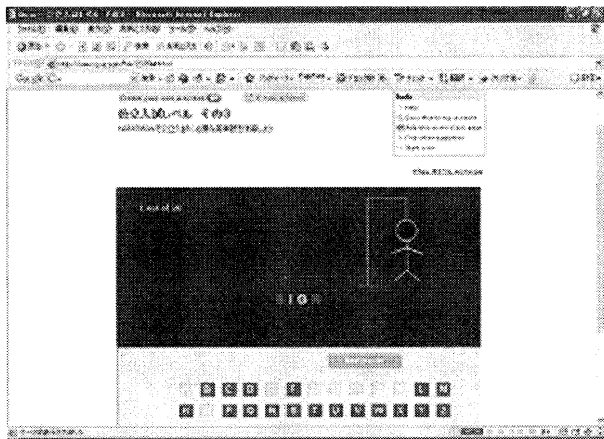
いろいろな形式の練習問題やアクティビティー、ブラウザ上で受けることができるテスト問題の作成等ができ、採点、成績管理等も行ってくれる。

ただし、これは無償でなく、年間\$49が必要となっている。

左は1年生の単語テストの一例である。

空欄に解答を書き込み、Submitをクリックするとサーバーに結果が送信され、瞬時にそれが生徒にフィードバックされる仕組みになっている。

何点とれたのか、どこが間違っていたのか等をすぐに知ることができ、生徒にとっても教師にとってもたいへん便利、かつ有益である。



左はアクティビティーの一例。

入試対策用に作成した Hang Man ゲームである。その他 Flashcard, Concentration, Word Search, Battleship, Jumbled Words 等々のいろいろな形式の、楽しみながら学習できる教材作成ができる。

#### (5) 留学生との交流活動－奈良校外学習（H18年度）－



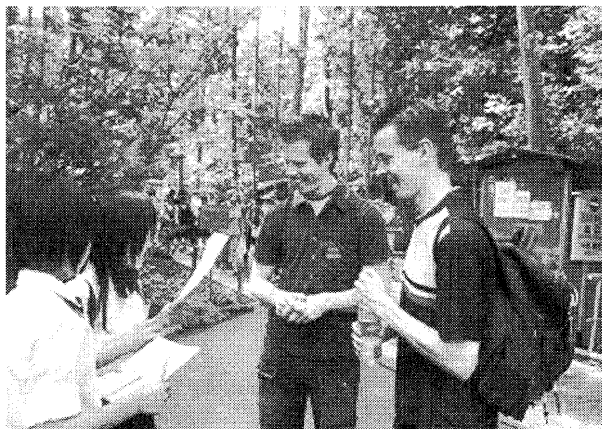
昨年度の特別活動の一つとして行った奈良校外学習では、和歌山大学の留学生とともに奈良の観光地を巡るという活動を行った。

留学生はほとんど日本語を話せないため、中学生と留学生がコミュニケーションをとれる手段は英語しかない。

事前準備のための英語の授業では、留学生を楽しく案内するために、必死でガイド原稿を作成する姿勢を伺うことができた。

実際のところ、校外学習当日には留学生が覚えてたの片言の日本語を使ってしまう場面も見られたが、様々な国の人々とふれあう機会を持つことができたことは子どもたちにとってたいへん貴重な体験であったと思う。

#### (6) 外国人観光客との交流活動－京都校外学習（H19年度）－



本年5月15日、総合的な学習（国際理解）の一環として、本校2年生が京都に出かけ、観光に訪れた外国の方々にインタビュー活動と日本文化紹介を行った。学級ごとに、金閣寺、二条城、八坂神社、平安神宮の4カ所を訪れ、班別でぶっつけ本番のインタビューを行った。

この取り組みは、紀の川市にある鞆渕中学校の伝統行事である「京都英会話の旅」を参考にさせていただいたものである。鞆渕中学校では毎年、夏休みに3

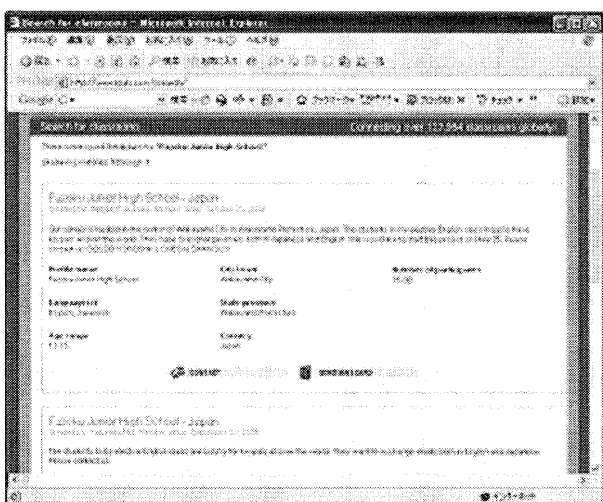
年生が一泊二日で京都に出かけ、外国人へのインタビュー活動を行っている。

平安神宮だけは予想外に外国人観光客が少なく、相手探しに苦勞をしたが、他の場所については多くの観光客に出会うことができ、日頃学校ではなかなか得られない英語を使う機会を持たせることができた。

まさに Authentic Material と呼ぶにふさわしい実践的コミュニケーション練習を行い、生徒たちにとっては英語を学ぶ上での極めて大きな動機付けとなったに違いない。



## (7) 電子メールによる交流のためのサイト epals.com



epals.com (<http://www.epals.com/>) とは、教室対教室での電子メールを使った交流をサポートしてくれるサイトである。本格的なメール交換を行うためにメールアドレスを取得するにはそれなりの費用がかかるが、30人までのアカウントは無料で発行してもらえるようになっている。ただし容量が小さく、画像などの大きなファイルを交換するには不向きである。このメールにはモニター機能がついており、生徒が送受信したメールはいったん指導者のメールボックスに送られ、指導者が承認を与えて初めて相手に送られたり、生徒に届いたりする仕組みになっている。メールによるトラブルを事前に回避するために、この機能は実にありがたい。

2・3年生合同の選択英語授業でこのサイトを利用し、オーストラリアやニュージーランドの生徒たちとメールの交換を行った。オーストラリアの学校の生徒たちは日本語を学んでおり、この生徒たちとは、向こうからは日本語で、こちらからは英語でメールの交換を行った。外国人が書いてくる日本語の文を読むことで、生徒たちはあらためて日本語の持つ特性や難しさなどを再認識することができたように思う。

左上の画像は、本校が epals に掲載している交流校の募集のための広告文である。相手を探すだけでなく、こうして相手からのコンタクトを待つこともできる。

左下は、メール交換を行った Sydney にある Strathfield Girls School の Abbe 先生のクラスの生徒たち。

最近では少し下火になりつつあるとはいえ、オーストラリアでの日本語学習熱にはかなりのものがあり、交流相手としてはお互いに都合の良いことが多い。

# 実践1 必修教科1年生

授業者 福元元章

① 題材 NEW HORIZON English Course 1 Unit 9 クリスマスがやってきた

② 題材について

(1) 生徒について

1年D組の生徒たちは、明るく元気で比較的男女の仲も良く、ペア学習やグループ学習にも億劫がらずに意欲的に取り組める子どもたちが多い。ただ、集中力を持続させることが難しく、少し油断をするとう駄話をしてしまう生徒も多い。また、他人の発言を静かに落ち着いて聞く姿勢に欠けるところもある。教科の種類や教材の中味にもよるだろうが、概ね中1の子どもたちが気持ちよく集中して一つの活動に取り組める時間はせいぜい5分前後が限度ではないだろうか。今回の活動案でも、「5分」をひとつの活動の区切りの目安として活動計画を考えた。子どもたちを飽きさせず、45分の時間をフルに活用してテンポ良い授業を展開したい。

(2) 教材について

Unit 8に続く内容の教材である。カナダのグリーン家に滞在するエミ、シン、ジュディー、マイクの4人を中心に物語が展開し、主にカナダにおける年末年始の過ごし方が中心に描かれている。日本とは違う習慣を理解させるとともに、話題に出てくる南半球と日本の季節の違いなどにも気づかせたい。文法事項としては現在進行形が中心に取り扱われている。カナダにおける生活場面を描写することで現在進行形の英文を効果的に習得させたい。

(3) 指導について

現在進行形は繰り返し練習を十分に行わせることにより、比較的理屈抜きに習得させやすい文法事項である。変化をつけながら、十分な繰り返し練習やパターン練習を行わせることで現在進行形の理解と定着を図りたい。またノートパソコンやプロジェクターを中心とした視聴覚に訴える教材・教具を効果的に活用し、生徒の興味・関心を引き出しながら指導の効果をさらに高められるように工夫したいと思う。

③ 学習目標と評価規準

学習の目標		①現在進行形を用いて、していることを表現したり、何をしているのかをたずねたりできる。 ②Don't～の命令文を用いて、してはいけないことを伝えたり、Beで始まる命令文を理解し、表現できる。 ③カナダの家庭でのクリスマスパーティーやオーストラリア(南半球)のクリスマスについて、また日本では見かけない標識等について理解している。			
評価規準		①コミュニケーションへの関心・意欲・態度	②表現の能力	③理解の能力	④言語や文化についての知識・理解
聞くこと	〈言語活動への取り組み〉 (ア)現在進行形を用いたコミュニケーション活動に意欲的に参加している。			〈正確な聞き取り〉 (ア)現在進行形を用いた文を聞いて、その意味を正確に理解できている。	〈言語についての知識〉 (ア)現在進行形を用いた文を聞いて、その意味を理解できる。
	〈コミュニケーションの継続〉			〈適切な聞き取り〉	〈文化についての理解〉
話すこと	〈言語活動への取り組み〉 (イ)現在進行形を用いたコミュニケーション活動に意欲的に参加している。		〈正確な発話〉 (ア)現在進行形を使って、相手に言いたいことを確実に伝えられている。		〈言語についての知識〉 (イ)現在進行形を用いて、伝えたいことを正しく話すことができる。
	〈コミュニケーションの継続〉				〈文化についての理解〉

読むこと	〈言語活動への取り組み〉 ペアでの音読練習に積極的に取り組んでいる。	〈正確な音読〉	〈正確な読み取り〉	〈言語についての知識〉 (ウ)教科書本文をルールに従って正しく音読することができる。
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な音読〉	〈適切な読み取り〉	〈文化についての理解〉 (エ)カナダやオーストラリアのクリスマスや日本では見かけない道路標識について理解している。
書くこと				〈言語についての知識〉 (オ)Unit 7 の新出語の意味が分かり正確に綴ることができる。 (カ)現在進行形を用いて正しい文を書くことができる。 (キ)Don't～の命令文やBeで始まる命令文を用いて伝えたいことを表現できる。
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な筆記〉		〈文化についての理解〉

④ 学習計画（単元構成表）＊本時は第2時

(1) 学習計画（全6時間）

第1時…Unit 9 Part 1

第2時…Unit 9 Part 2（本時）

第3時…Unit 9 Part 3

第4時…Unit 9 の復習(1)

第5時…Unit 9 の復習(2)

第6時…CALL システムを用いた Unit 9 を中心とした補充・発展学習

(2) 学習活動と学びのサイクルについて

時	ね ら い	学 習 活 動	教師の働きかけと学びのサイクルについて	評価規準
1	・現在進行形の肯定文を用いて、今していることを表現できる。	・現在進行形の肯定文の学習 ・Unit 9 Part 1 の新出語の学習 ・Unit 9 Part 1 の教科書本文の内容理解	・現在進行形の肯定文を用いた英文の意味が理解でき、また現在進行形の肯定文を用いて、簡単なことを表現できるようにさせる。(習得) ・Unit 9 Part 1 の新出語を繰り返し練習によって確実に理解させる。(習得) ・Unit 9 Part 1 の本文を十分な音読により理解させる。(習得)	④ーアイカ ④ーオ ④ーウ
2	・What を含む現在進行形の疑問文を用いて、何をしているのかをたずねたり、答えたりできる。	・現在進行形の疑問文の学習 ・Unit 9 Part 2 の新出語の学習 ・Unit 9 Part 2 の教科書本文の内容理解	・現在進行形の疑問文を用いた英文の意味が理解でき、また現在進行形の疑問文を用いて、相手にたずねることができるようにさせる。(習得) ・Unit 9 Part 2 の新出語を繰り返し練習によって確実に理解させる。(習得) ・Unit 9 Part 2 の本文を十分な音読により理解させる。(習得)	③ーア ④ーエカ

3	<ul style="list-style-type: none"> <li>Don't～の命令文を用いて、してはいけないことを伝えたり、Be～の命令文を理解し、表現できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Don't～を使った命令文とBe～を使った命令文の学習</li> <li>Unit 9 Part 3 の新出語の学習</li> <li>Unit 9 Part 3 の教科書本文の内容理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在進行形の肯定文を用いた英文の意味が理解でき、また現在進行形の肯定文を用いて、簡単なことを表現できるようにさせる。(習得)</li> <li>Unit 9 Part 3 の新出語を繰り返し練習によって確実に理解させる。(習得)</li> <li>Unit 9 Part 3 の本文を十分な音読により理解させる。(習得)</li> </ul>	④ーエキ
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>Unit 9 で学習した単語や基本文を確実に定着させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Unit 9 で学習した新出語の復習</li> <li>現在進行形の文の復習</li> <li>Don't～を使った命令文とBe～を使った命令文の復習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ゲームやペアワークを用いて、新出語や新出文型の復習を行い、定着を図る。(次時に単語テストを行う)(習得)</li> </ul>	②ーア ③ーア
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在進行形の肯定文、否定文、疑問文を用いて伝えたいことを正確に表現できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Unit 9 の単語テスト</li> <li>ペアワークやグループワークによって現在進行形をコミュニケーション活動の中で用いる練習を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>できるだけ現実味のあるコミュニケーション活動を設定し、その中で現在進行形が使えるように指導する。(探究)</li> </ul>	④ーオ ①ーアイ
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>CALLを活用してUnit 9 の補充学習を行う。また個々の学習の進捗や興味・関心に応じて発展的な課題にも取り組ませる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>CALLの学習プログラムに取り組む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個々の生徒の能力に配慮しながら、難しい問題にもチャレンジさせる。(習得)(探究)</li> </ul>	③ーア ④ーオカキ

##### ⑤ 本時の目標

- Whatを含む現在進行形の疑問文を聞いて、その意味が正確に理解でき、また何をしているのかをたずねたり、答えたりすることができる。
- オーストラリアでのクリスマスの過ごし方や南半球における季節について、また日本では見かけない道路標識等について理解している。

##### 本時の具体的評価規準及び評価の方法

評価の観点	具体的評価規準	評価・備考
コミュニケーションへの関心・意欲・態度		
表現の能力	(ア)現在進行形の疑問文を用いて、いくつかの動作についてたずねることができ、また適切に応答することができる。(話す)	・現在進行形の英文を使ったカードゲームの観察
理解の能力	(イ)現在進行形の疑問文を聞いて、その意味を正確に理解することができる。(聞く)	・現在進行形の英文を使ったカードゲームの観察
言語や文化についての知識・理解	(ウ)Whatを含む現在進行形の疑問文を用いて、何をしているのかをたずねたり、答えたりする英文を正しく書くことができる。(書く) (エ)オーストラリアでのクリスマスの過ごし方や南半球における季節について理解している。(読む)	・ワークシートにおけるライティング練習 ・音読活動の観察



## ⑥ 本時の展開

過 程	時間	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評価・備考
1. ウォームアップと復習	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶する。</li> <li>現在進行形（肯定文）のリズムトレーニングを行う。</li> <li>現在進行形（肯定文）の練習のためのペアワークを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶する。</li> <li>現在進行形の英文をリズムに合わせて繰り返し発音することで現在進行形の英文のパターンを定着させる。</li> <li>大きな声で発音させることにより、英語を使う雰囲気を作る。</li> <li>ペアによる口頭英作練習を行わせ、現在進行形（肯定文）を復習させる。</li> </ul>	ドラムパッド  ワークシート
2. 導入	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在進行形の疑問文を使った英文を聞き、疑問文のパターンに気づく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アニメーションや画像を用いて、現在進行形の疑問文を導入し、その形・意味・用法に関する理解を促す。</li> <li>生徒とのインタラクションを大切に</li> </ul>	ノートPC プロジェクター
3. 展開	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在進行形（疑問文）を使った英文を言う練習をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スライドを活用しながらスピーディーにパターン練習を行わせる。</li> </ul>	ノートPC プロジェクター
	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在進行形（疑問文）を使った英文を書く練習をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークシートを用いて現在進行形（疑問文）のライティング練習を行わせる。</li> </ul>	評価規準 (ウ) ワークシート
	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>インターネット上のオーストラリアのリアルタイム映像を見ながら、オーストラリアと日本との時差や季節差を理解する。</li> <li>Unit 9 Part 2 のビデオクリップを見て、本文の概要をつかむ。</li> <li>新出単語を学習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ウェブカメラによるシドニーの映像や時計を見せながら、日本とオーストラリアの時差や季節差に気づかせる。</li> <li>ビデオクリップを見させて、本文の概要をつかませる。</li> <li>電子フラッシュカードを用いてスピーディーに新出語を導入し、発音練習を行わせる。</li> </ul>	ノートPC プロジェクター
4. まとめ	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在進行形（疑問文）を使ったカードゲーム行い、現在進行形（疑問文とその応答）の理解の定着を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペアでカードゲームを行わせる。</li> </ul>	評価規準 (ア) 絵カード
	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>次時の課題を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>次時の宿題を指示し、次時の学習について知らせる。</li> </ul>	

## ⑦ 結果と考察

### (1) 基礎・基本の確実な定着

今回の授業では、習得サイクルに重点を置き、反復練習を主体に、基礎・基本の確実な定着をねらいとして授業を計画・実施した。英語の学習においては、語彙や文法などの言語材料を獲得（習得）させ、それらを基礎とした言語運用能力を育成（探究）することが最終的な目標である。理想的な実践的コミュニケーション能力の獲得はこれらの2つの学習の適正なバランスの上に実現されるものである。

しかしながら、初めて英語学習がスタートする中学生においては、特に習得サイクルの中で基礎・基本が十分に定着されることが重要である。豊かな知識・技能があってこそ初めて豊かな探究活動が展開できる。従って習得サイクルにおいては指導者中心の学習を計画し、しっかりと「教え込む」という姿

勢が大事だと思われる。「自ら学び自ら考える」ことのできる生徒を育成することが最終目標だが、そこに至るまでの基礎・基本の徹底的な教え込みを躊躇してはならない。

基礎・基本の定着のためには、十分な反復練習が欠かせない。限られた時間の中でいかに多くの英語を声に出させ、耳で聞かせ、手で（あるいはキーボードで）書かせることができるか。それが私たち英語教師に課せられた大きな課題である。今回の授業では、

- ① 5～10分を一区切りとしたテンポの良いスピーディーな授業展開
- ② ICT機器の利用による無駄な時間を省いた効率的な授業展開
- ③ ICT機器の利用による、変化のある反復練習

によって、それらの課題に対して大きな前進を見ることができたと思う。

## (2) ICTの活用

ICT機器の活用は、授業における無駄な労力を省き、変化のある繰り返しを可能にしてくれる。今回の授業では普通教室において、簡易CALL装置（通称「コロコロ」）を用いた授業を試みたが、簡単な装置でも極めて有効に利用できることが証明された。「コロコロ」利用の具体的なメリットは、

- ① 従来のフラッシュカード、ピクチャーカード、英文短冊カード、DVD等の代わりにパワーポイントによるスライドやWMV形式の動画を用いることにより、ダイナミックな授業展開が可能になった。
- ② 板書やカードを黒板に張り付けたりする時間を省き、他の学習活動にその時間を回すことが可能となった。
- ③ 「コロコロ」は、朝一度授業準備をノートPCに仕込んでしまえば、あとはそれを教室に移動させて、電源を入れるだけで使用できる。教室にパソコンとプロジェクターが常設されていると、授業教室ごとにいちいち準備・後片付けを行わねばならないへん不便である。

工夫次第ではまだまだ大きな可能性が秘められているように思う。さらに改良を重ねて、より使いやすく、より効果的な教材開発にチャレンジしていきたい。

## (3) 協同学習の手法の導入

「① ペアやグループの中の一人のメンバーの学習が、他のメンバーにとっても利益となっているか。② ペアやグループで学習することに必然性があるか。」これらは、協同学習が成立するための一つの指標である。今回の研究授業では、3つの場面で協同学習的な手法を試みた。1つめは、復習のために行ったペアによる口頭英作練習、2つめは、本文の音読練習、3つめは、まとめで行った現在進行形（疑問文）定着のためのカードゲームである。

1つめの口頭英作練習では相互の学び合いがあるため、①の条件はクリアしているが、②はどちらとも言い難い。2つめのペアによる音読練習では、①については互いの読みが相手に少なからず影響を与える点ではクリアしていると言える。②については必然とまでは言い難いが、対話文を2人で読む練習をすることは、一人で行うよりはより自然なシチュエーションを形成することができると思う。3つめのカードゲームについては、①、②ともに条件をクリアしていると考えられる。

協同学習的な手法を導入することによるメリットとして、例えば Listen&Repeat の音読練習では積極的に口を開こうとしない生徒がペアリーディングを行うと声に出して読み始める、あるいは、教師対生徒でQ&Aをすれば、せいぜい4～5人の生徒としか行えない対話練習が、ペアによるカードゲームを取り入れることにより、同じ時間ではほぼ全員の生徒が対話練習を行うことができる等、授業がより活性化し、効率的になることが確かめられた。今後も、英語科においてどのような協同学習が可能なのか、またそれはどのような学習効果をもたらすのかを、追究し、実践し、検証していくことが必要である。

① 題 材 NEW HORIZON English Course 2 [ Multi Plus 3 わたしの町]

② 題材について

Multi Plus 3 では、町の様子を描写した英文を理解する (Reading)、街の様子を聞く (Listening)、自分の街について言う (Speaking)、自分の町の紹介文を書く (Writing) と英語の 4 技能すべてを使った総合的な活動を取り入れ、自己表現力をつけることを目標にしている。また、授業では、さまざまな場面において英語に親しみ、初歩的な英語を用い「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 技能を機能させて、できるだけ多くの言語活動を取り入れていくことを目指している。

この Multi Plus 3 では、「わたしの好きな町」を取り上げ、Reading、Listening、Speaking と活動を進めていく。最終段階で Writing を中心にした自己表現活動に取り組み、CALL システムを積極的に活用した授業展開を行いたい。コンピュータ、プロジェクトなど視聴覚に訴える教材とともに、発展的な CALL システムの機能を生かした活動も効果的に取り入れていきたい。そこから英語科の本年度の取り組みの重点である①CALL 室の活用を取り上げ、「基礎・基本」を重点的に身につけさせるペアやグループでの活動を効果的に取り入れた学習場面を設定し、「個性を拓く学び」に迫る。

③ 学習目標と評価規準

学習の目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・町の様子を描写したり紹介したりする英文を理解することができる。</li> <li>・自分の好きな町の紹介文を書くことができる。</li> </ul>		
規 準	①コミュニケーションへの関心・意欲・態度	②表現の能力	③理解の能力	④言語や文化についての知識・理解
聞 く こと	〈言語活動への取り組み〉 ア. 興味や関心を持って教師や生徒の英語を聞こうとしている。		〈正確な聞き取り〉 ア. 町を紹介する英文を正しく理解できている。	〈言語についての知識〉
	〈コミュニケーションの継続〉		〈適切な聞き取り〉	〈文化についての理解〉
話 す こと	〈言語活動への取り組み〉 イ. 町の様子を既習の英語を使って話そうとしている。	〈正確な発話〉 ア. 町の様子を相手に正しく伝えるように話すことができる。		〈言語についての知識〉
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な発話〉		〈文化についての知識〉
読 む こと	〈言語活動への取り組み〉	〈正確な音読〉	〈正確な読み取り〉 イ. 町の紹介文を読んで、町の特色をつかむことができる。	〈言語についての知識〉
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な音読〉	〈適切な読み取り〉	〈文化についての知識〉
書 く こと	〈言語活動への取り組み〉 ウ. 町を紹介する英文を既習の表現を使って書くことができる。	〈正確な筆記〉 イ. 町を紹介する英文を正しく書くことができる。		〈言語についての知識〉
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な筆記〉		〈文化についての知識〉

#### ④ 学習計画（単元構成表）

学習計画（全3時間）＊本時は第2時

第1時 Multi Plus 3（Step 1, Step 2, Step 3, Step 4）発表原稿作成

第2時 発表原稿作成とリーディング練習（本時）

第3時 Writing 鑑賞会

#### ⑤ 本時の目標

○自分の好きな町を紹介する英文を書くことができる。

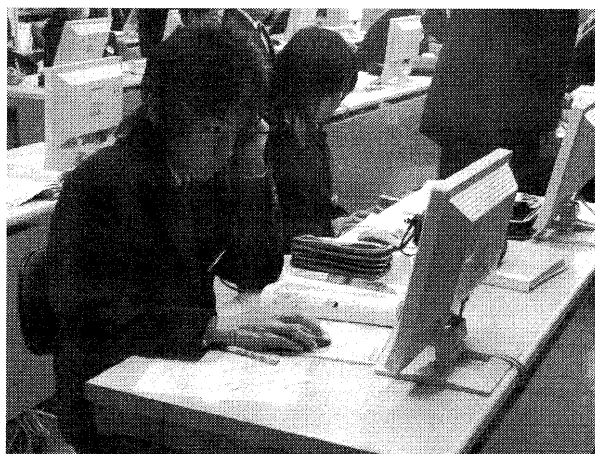
#### ⑥ 本時の展開

過 程	時間	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評価・備考
1. 復 習	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶する。</li> <li>ペアで既習事項を使って対話する。</li> <li>単語ゲームをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語で学習する雰囲気を作る。</li> <li>平易な表現を用いてチャットを楽しむ。</li> <li>CALLシステムの使い方について確認させる。</li> </ul>	コンピュータプロジェクト
2. 導 入	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習の表現を使ったリスニングクイズをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>CALLシステムの使い方について注意を促す。</li> </ul>	リスニングソフト
3. 展 開	20	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の好きな町の紹介文を書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>紹介文の中には直接好きな町の名前は出さず、ヒントとなるような英文を折り込んだ文にさせる。</li> </ul>	評価規準②－イーワークシート コンピュータ
	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペアで発表し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英文を聞いて相手の好きな町がどこであるか考えさせる。</li> </ul>	プロジェクト
	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>紹介文を録音する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>紹介文をスピーキングしたものを録音し、音声提出させる。</li> </ul>	評価規準③－イスピーキングソフト
4. まとめ	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>次時の課題を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>次時の学習について知らせる。</li> </ul>	

#### ⑦ 結果と考察

今回 Multi Plus の授業を CALL 教室で行ったことで次のような点において効果が見られた。

- ① 生徒の個々の「書きたい」という気持ちを大切に、インフォメーションギャップを取り入れた課題を設定することで、生徒の「英語を書きたい」意欲をさらに高めることができた。
- ② 教室での Writing 活動では英和や和英の辞典を活用するが、調べた単語の発音まで生徒一人ひとりのニーズに応えることは難しい。CALL教室でコンピュータを使いWeb上の英和辞典を活用することで、単語のつづりだけでなく発音の仕方についても個々に対応することができた。
- ③ 導入部では写真を活用したリスニングクイズを出題し、視覚に訴える教材を作成することができた。
- ④ 自分が作った英文を何度も読む練習をし、音声録音・音声提出することにより、英語を読ませるチャンスを増やすことができた。またクイズの出題、出題を臨場感あるものに仕上げることができ、活動を楽しく進めることができた。
- ⑤ 紹介文も一斉回収し、Writing 鑑賞会を行ったが、音声と文書の両方で鑑賞することができたため、生徒が読んでいる英文で Listening、生徒が書いた英文で Reading の練習をすることができ、英文をよ



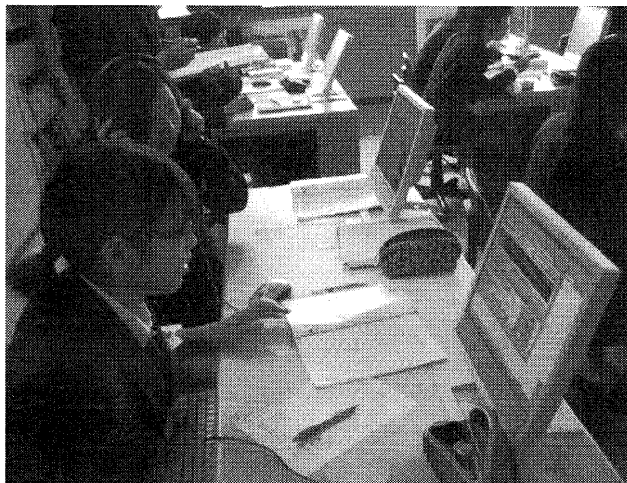
り身近に感じることができた。

しかし、CALL教室での授業、CALLシステムを活用する授業はまだ自分自身研究途中であるため、工夫や考えていかなければいけない所がある。具体的には次のような課題がある。

- ① 教室での授業とCALL教室での授業をしっかりと関連づけ、計画を立てなければならない。
- ② コンピュータを使うという特性上、CALL教室で「コミュニケーション」活動ととらえる授業の組み立て方に工夫が必要である。今の時点では「コミュニケーションのためのインプット」としてとらえ、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を繰り返し充分に行えるように活動を設定している。
- ③ Writing活動を進める時はいつもだが、40人での授業で、どこまで生徒個人の支援ができていくかという点において難しさを感じる。今回は単語の発音の仕方という点でコンピュータのAssistを受けたが、生徒のつぶやきや「もっとこう書きたいなあ」という気持ちに応えることができなかった。
- ④ 授業中にどうしてもコンピュータを操作する時間が必要になるため、できるだけ操作やそれに関わる時間が少なくなるような教材の開発が必要である。

「教科書の本文を読もう」この課題を教室では、全体で読んだり、ペアで読んだり、グループで読んだりときざまな形態での展開が可能である。しかし教室で「読むこと」は通り過ぎてしまうように流れていってしまうことも多いのではないだろうか。CALL教室では特に「読むこと」や「話すこと」についてとてもシリアスである。ヘッドフォンとマイクを通して発音やイントネーションなどのチェックができるため、他の誰かに英語を聞かれることが少なく、しっかり発音練習ができる。モデルの音声を個々にボリュームやスピード、リピートの練習ができるため、じっくりと課題に取り組むことができる。何となくやり過ごしていると、音声提出の時には自分が困る…。

生徒たちはCALL教室での英語の授業を楽しみにしている。CALL教室やCALLシステム、CALL機器を有効に活用するため、今後は教室でのCALL機器の活用も含めて取り組んでいきたいと考えている。



## わたしの町

調べてきたものをもとに「自分の好きな都市」について英文を書きましょう。

It's in the Europe, and in the Mediterranean Sea.

It's famous for Colosseum, Fountain Trevi and Tower Pendente in Pisa.

There is the Vatican City in the this country's capital.

It's famous for wine, pizza, pasta, grape and olive.

There are a lot of world inheritance in this country.

This country is very beautiful.

## ☆文章構成の例☆

- ①地理的な理由を述べる
- ②特色を述べる（４文以上）
- ③結びの文を入れる



## ～評価のポイント～

- ・意欲的に Writing 活動に取り組んでいるか。
- ・自分の好きな都市の特色が伝わる英文が書けているか。

## わたしの町

調べてきたものをもとに「自分の好きな都市」について英文を書きましょう。

It's is the Europe,

It's an island.

It's in the west of Germany.

It was in addition to EC in 1973.

It's famous a Big Ben in the there.

I like to it.

## ☆文章構成の例☆

- ①地理的な理由を述べる
- ②特色を述べる（４文以上）
- ③結びの文を入れる



## ～評価のポイント～

- ・意欲的に Writing 活動に取り組んでいるか。
- ・自分の好きな都市の特色が伝わる英文が書けているか。

## わたしの町

Class (12) Name (12) (12)

調べてきたものをもとに「自分の好きな都市」について英文を書きましょう。

It's in the south of Japan.  
 It's famous for its beautiful sea.  
 A lot of people swim in the sea in summer vacation.  
 It's famous for its pineapples.  
 I like it very much because it's very good.  
 I like the city.

☆文章構成の例☆

- ①地理的な理由を述べる
- ②特色を述べる（４文以上）
- ③結びの文を入れる



～評価のポイント～

- ・意欲的に Writing 活動に取り組んでいるか。
- ・自分の好きな都市の特色が伝わる英文が書けているか。

## わたしの町

調べてきたものをもとに「自分の好きな都市」について英文を書きましょう。

It's north of Japan.  
 It's very cold.  
 It is the biggest city in Japan.  
 It's famous for butter and cheese.  
 It's very delicious.  
 I like the city.  
 I want to go to the city someday.

☆文章構成の例☆

- ①地理的な理由を述べる
- ②特色を述べる（４文以上）
- ③結びの文を入れる



～評価のポイント～

- ・意欲的に Writing 活動に取り組んでいるか。
- ・自分の好きな都市の特色が伝わる英文が書けているか。

## 実践3 必修教科3年生

授業者 船 津 真 理

① 題 材 Unit 6 20<sup>th</sup> Century Greats (New Horizon English Course 3 : 東京書籍)

② 題材について

(1) 生徒について

本学級の生徒は英語学習において能力の高い生徒が多く、そのため英語に対して意欲的に取り組むことができる生徒が多い。その反面、英語が非常に苦手な生徒が全く理解できていないだけでなく、1年生で習った初歩的な単語すら正確に綴ることのできない生徒が数名いるというのが現状である。その数名の生徒は、放課後の勉強会に参加したり、積極的に教師や友人に質問したりして少しでも分かるようになるという意欲を持っている生徒と、学校生活で授業を大切にしようという気持ちに欠けている生徒に分かれる。後者は学級活動における班活動でも自己中心的な行動が多く見られ、他と協調しようという気持ちに欠けている。しかしそのような生徒も授業では生活班とは別のペアやグループで活動しなければならない時には協力する場面も見られるということから、英語学習ではペアやグループを組み替えてみたり、サブティーチャーを彼らに付けたりする機会を作り、遠慮なく質問できる状況を設定している。本題材でもペアやグループ、サブティーチャーを大いに活用して基礎・基本を定着させたい。

(2) 教材について

Unit 6 では20世紀を代表する偉人を、関係代名詞を用いてレポート形式で紹介するという場面設定がされている。中でもレイチェル・カーソンの偉業を採り上げ、彼女が早くから気付いた環境の変化による人類に迫る危機を警告した‘Silent Spring’について触れ、今や現実問題となっている環境問題を身近な問題としてとらえ、考えようとする姿勢の育成をねらう。レイチェル・カーソンは中学生にとってはあまり馴染みのない人物であるが、環境問題が現実となっている今、人物を通さずともその深刻さを想像するのは容易なことである。本題材を通して1950年代、環境問題は発展という大義の陰になり、人類を脅かす脅威になるとは誰もが考えていなかったことと彼女の偉業を知り、環境問題が自分たちの問題であることに気付かせ、環境に配慮した発展とは、という点から自分たちができることをしっかり考えさせたい。また、言語材料としては3年生最後の新出文法である接触節と関係代名詞を扱う。接触節や関係代名詞はそれを用いることでより、伝えたいことを的確に表現することができる便利な表現である。特に接触節は口語としてよく用いられる表現であるので、本題材では節が先行詞を修飾する関係代名詞より先に接触節を扱うことで、語順の入れ替わりという導入から関係代名詞へと展開し、再び接触節の文構造が関係代名詞の省略であるという気付きのある授業を展開したい。

(3) 指導について

本単元では既習の後置修飾と接触節や関係代名詞の文の構造の違いに多くの気付きを与え、理解を定着させるために学び合いの場を効果的に設定し利用する。特に、学び合いについては音読練習を個別からペア、ペアからグループという段階で行い、客観的なアドバイスをグループ内で交わし合い、生徒各々の音読技術の向上を図る。学習は「語彙や文法の習得」を経て「レポートを作成」し、「レポートを発表」という展開で進め、「豊かな学び」の三つの視点からなる学びを共有させることにより、個を育みたい。そして、その実現のために本校英語科で昨年度からその取り組みの重点としている学習場面のあり方（①CALL室やCALL機器の活用と②Authentic Materialの活用）の中でも、本年度は普通教室におけるCALL機器の効果的な利用に着目し、実践的コミュニケーション能力の獲得を目指したい。

③ 学習目標と評価規準

(1) 学習目標

① 20世紀の偉人たちに興味・関心をもち、その中の1人の人物像・業績・生涯についての話の内容を



理解することができる。

② 接触節の形・意味・用法を理解し、表現することができる。また、関係代名詞（主格、目的格）を用いた文の形・意味・用法を理解することができる。

③ 自分が読んだり聞いたりして調べたことの概要をまとめるという作業を通して、英語でレポートを書くことができるようになる。

## (2) 本単元における具体の評価規準

規 準	①コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	②表現の能力	③理解の能力	④言語や文化についての 知識・理解
聞 く こ と	〈言語活動への取り組み〉		〈正確な聞き取り〉	〈言語についての知識〉
				ア、接触節や関係代名詞の文の形、意味、用法についての知識が身についている。
	〈コミュニケーションの継続〉		〈適切な聞き取り〉	〈文化についての理解〉
			ア、教師やＣＤの英語を聞き、大まかな話の内容を聞き取ることができる。	
話 す こ と	〈言語活動への取り組み〉	〈正確な発話〉		〈言語についての知識〉
	ア、間違いを恐れずレポートを発表している。			
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な発話〉		〈文化についての理解〉
読 む こ と	〈言語活動への取り組み〉	〈正確な音読〉	〈正確な読み取り〉	〈言語についての知識〉
	イ、ペアやグループでの読む活動に意欲的に取り組んでいる。	ア、正しい強勢、イントネーション、区切り等を用いてテキストを音読することができる。		イ、テキストの語句の発音や文の強勢などについての知識がある。
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な音読〉	〈適切な読み取り〉	〈文化についての理解〉
			イ、テキストに書かれている情報について段落毎のまとまりを読み取ることができる。	
書 く こ と	〈言語活動への取り組み〉	〈正確な筆記〉		〈言語についての知識〉
	ウ、接触節や関係代名詞の文やその他の習った文や語句を用いて英文を書こうとしている。	イ、接触節や関係代名詞を用いて伝えたいことを正しく書くことができる。		ウ、接触節や関係代名詞の文の形、意味、用法についての知識が身についている。
	〈コミュニケーションの継続〉	〈適切な筆記〉		エ、テキストの語句を正しく綴ることができる。
		ウ、習った文や語句を用いてレポートを書くことができる。		〈文化についての理解〉

\*①ーア・イ・ウ、②ーア、③ーイ、④ーイについては形成的な評価にとどめる。④ーア・ウ・エ、②ーウ、③ーイについては総括的な評価の資料とする。

④ 学習計画（単元構成表）本時は第2時

(1) 学習計画

- 第1時 Starting Out (P.58)  
 第2時 Dialog (P.59) (本時)  
 第3時 Reading for Communication ●レポートをまとめよう (P.60)  
 第4時 Reading for Communication ●情報を読み取ろう (P.61)  
 第5時 Reading for Communication ●レポートを完成しよう (P.62)  
 第6時 20世紀の偉人についてレポート作成 (レポートを書く)  
 第7時 20世紀の偉人についてレポート作成 (レポートを仕上げる)  
 第8時 関係代名詞をマスターしよう exercise (ふりかえりと文法のまとめ)

(2) 学習活動と学びのサイクルについて

時	ね ら い	学 習 活 動	教師の働きかけと学びのサイクルについて	評価規準
1	○接触節の文の形、意味、用法を理解する。 ○テキストの内容を読み取り、課題の内容を理解する。	・前時の復習 ・テキストの音読と内容理解 (P.58) ・新出単語の学習 ・接触節の文の学習 ・接触節を用いた英文表現	・リスニング練習を行う。『探究』 ・音読の繰り返しに飽きないよう工夫する。『習得』 ・大まかな内容を読み取らせる。『習得』『探究』 ・発音や意味を繰り返し確認する。『習得』 ・ポイントを説明し、ワークシートに取り組ませる。『習得』『探究』 ・接触節を用いて英文でクイズを作らせる。『探究』	③ーア ③ーイ ④ーイ
2	○主格（人）の関係代名詞の文の形、意味、用法を理解する。 ○テキストの内容を読み取る。	・接触節の復習 ・テキストの音読と内容理解 (P.59) ・新出単語の学習 ・主格（人）の関係代名詞の文の学習	・練習問題に取り組みせ、接触節の文の構造や意味、用法を復習する。『習得』 ・音読の繰り返しに飽きないよう工夫する。『習得』 ・大まかな内容を読み取らせる。『習得』『探究』 ・発音や意味を繰り返し確認する。『習得』 ・ポイントを説明し、ワークシートに取り組ませる。『習得』『探究』	③ーイ ④ーイ ③ーア
3	○主格（物）の関係代名詞の文の形、意味、用法を理解する。 ○テキストの内容を読み取り、レイチェルカーソンの業績を知る。	・主格（人）の関係代名詞の復習 ・テキストの音読と内容理解 (P.60) ・新出単語の学習 ・主格（物）の関係代名詞の文の学習	・練習問題に取り組みせ、主格（人）の関係代名詞の文の構造や意味、用法を復習する。『習得』 ・音読の繰り返しに飽きないよう工夫する。『習得』 ・大まかな内容を読み取らせる。『習得』『探究』 ・発音や意味を繰り返し確認する。『習得』 ・ポイントを説明し、ワークシートに取り組ませる。『習得』『探究』	④ーウ ②ーア ②ーイ ④ーイ
4	○目的格の関係代名詞の文の形、意味、用法を理解する。 ○テキストの内容を読み、カーソンの生涯を知る。	・主格（物）の関係代名詞の復習 ・テキストの音読と内容理解 (P.61) ・新出単語の学習	・練習問題に取り組みせ、主格（物）の関係代名詞の文の構造や意味、用法を復習する。『習得』 ・音読の繰り返しに飽きないよう工夫する。『習得』 ・大まかな内容を読み取らせる。『習得』『探究』 ・発音や意味を繰り返し確認する。『習得』	②ーウ ④ーイ

		・目的格の関係代名詞の文の学習	・ポイントを説明し、ワークシートに取り組ませる。『習得』『探究』	
5	○レイチェル・カーソンの生涯についてレポートを完成させることができる。  ○星野道夫の世界を読み、自然環境について考えることができる。	・目的格の関係代名詞の復習 ・レイチェル・カーソンの生涯についてレポートを完成させる。(P.62) ・単語テスト  ・星野道夫の世界を読む(P114-119)	・リスニング問題に取り組み、目的格の関係代名詞の文の構造や意味、用法を復習する。『習得』 ・テキスト P.60、61を読み、レイチェルの生涯についてまとめ、発表する。『習得』『探究』 ・CDで単語を聞き、聞き取った単語と意味を書く。『習得』 ・現代の環境破壊問題について、自分たちができることを考え、発表する。『探究』	④ーア  ④ーエ ①ーイ
6	○20世紀の偉人について英文でレポートを作成することができる。	・20世紀の偉人についてのレポートを英文で書かせる。	・テキスト P.58 の写真の人物から一人を選び、英文でレポートを書く。『探究』 ・文のつながりを考えて書く。『探究』	②ーウ ①ーウ
7	○20世紀の偉人について英文で作成したレポートを発表することができる。	・20世紀の偉人についての英文レポートを発表させる。	・英文で作成したレポートを発表する。『探究』	①ーア
8	○関係代名詞の文構造を理解し、それを用いてコミュニケーションすることができる。	・関係代名詞の文構造の復習 ・関係代名詞を用いたコミュニケーション活動	・文法を整理し、練習問題に取り組む。『習得』『探究』 ・ペアで会話練習する。『探究』	④ーウ ②ーイ

\* 表中の評価規準については3(2)の具体的評価規準を示す。

## ⑤ 本時の目標

- 関係代名詞whoを用いた文の形・意味・用法を理解し、英文を書くことができる。
- テキストを読み、絵美とグリーン先生の会話の内容を理解することができる。

### 本時の具体的評価規準及び評価の方法

評価の観点	具体的評価規準	評価・備考
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	ペアでのリーディング活動に協力しながら取り組むことができる。(読むこと)	活動の観察
表現の能力		
理解の能力	会話の大まかな内容を読み取ることができる。(読むこと)	ワークシートにおける取り組みの観察
言語や文化についての知識・理解	主格の関係代名詞を用いて英文を正しく書くことができる(書くこと)	ワークシートにおけるライティング活動

## ⑥ 本時の展開

過程	時間	学習活動	教師の支援	評価・備考
1. 復習	5	・挨拶する。 ・接触節に関する練習問題に取り組む。 ・前時のビデオクリップを見て、内容を確認する。	・挨拶する。 ・理解できていない生徒に支援する。 ・生徒とのインタラクションを通して進める。	ノート PC プロジェクター
2. 導入	5	・関係代名詞を含む英文を聞き、意味を推測する。 ・本時のめあてを確認する。	・写真を見せながら英文をゆっくり言い、その後で英文を見せる。	ノート PC プロジェクター

3. 展 開	10	・関係代名詞の文構造、意味を知る。	・ノート PCを利用して文の構造が分かるように工夫する。	ワークシート
	6	・ビデオクリップを見て、話題の内容を知る。 ・新出語句の確認をする	・本文の内容を大まかに理解させる。 ・Power Point を用いて発音練習させる。	ノート PC プロジェクター
	8	・本文を音読し、内容を理解する。	・音読の繰り返しの飽きないように工夫する。 ・読み取るポイントをまず示しておく。	評価規準 ①ーイ ノートPC プロジェクター
	5	・内容を確認するためワークシートに取り組む。	・机間巡視し、理解できていない生徒に支援する。	ワークシート 評価規準 ③ーイ
4. まとめ	6	・関係代名詞を含む英文を聞き、質問に答える。 ・関係代名詞を用いて英文を書く。 ・関係代名詞を含む英文を言う練習をする。	・クイズ形式にし、分かりやすい工夫をする。 ・クイズの答えを英文で書かせる ・ノートPCを活用し、パターン練習を行う。	ワークシート ノート PC プロジェクター 評価規準 ④ーウ

## ⑦ 結果と考察

### (1) CALL 機器の活用について

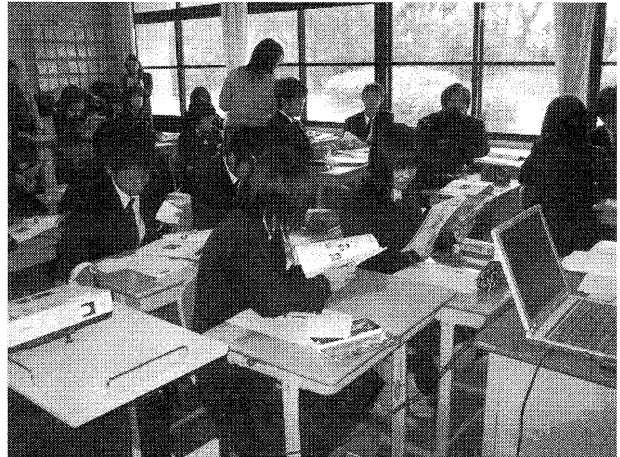
今年度より本校では一単位時間45分の授業が実施されている。これまでの50分授業と比べてみるとたった5分短くなっただけであるが、まとめを行っていた最後の時間がなくなるということである。まとめの時間を確保するために、これまで行ってきた言語活動や解説を短縮するというわけにはいかないし、まとめを短縮するというわけにもいかない。こうしてこれまでの自分の授業を振り返り、短縮できる部分は何だろうかと考えた。板書をしている時間、フラッシュカードを繰る時間、場面の確認をする時間、私の授業には短縮できる部分がたくさんあった。ノートパソコンとプロジェクターを教室に持ち込むことでこの三点の無駄を省くことが可能になった。CALL 機器の活用によって効果を上げた部分について触れようと思う。

一点目に、それまで板書に数分かけていたのがワンクリックで板書ができあがるということである。私たち教師は授業で全く板書しないということは絶対にありえない。しかし板書をしている間、教師は生徒に背を向け、生徒は書き終わるのを待っている。時間がもったいないからといって板書をしないというわけにはいかない。そこで、あらかじめパワーポイントで作成しておいたデータをスクリーンに映し出すだけで板書がワンクリックで完成する。板書に割かれていた時間を大幅に短縮することで生徒がコミュニケーション活動をしたり、多くの反復練習を取り入れたりすることができるのである。生徒ができるだけ多く英語を使う時間を確保することは英語運用能力の向上につながる。

二点目に、フラッシュカードをテンポよく繰れないために新出単語の確認にかけていた時間を大幅に短縮し、短時間で確実にフラッシュ効果を引き出すことができるということである。それまで画用紙を短冊にしたものに新出単語を書き、フラッシュカードにして新出単語を学習していたのが、パワーポイントで作成した単語のデータをテンポよくフラッシュさせることでよりリアルなフラッシュ効果を得ることが可能になった。画用紙ではフラッシュさせるのに手間取ったり、逆さまになったりすることもあり、せっかく手間をかけて作成したフラッシュカードがその効力を発揮せず、単語を覚えるのに時間がかかるという生徒もいたが、デジタル機器を授業に利用することで「百聞は一見に如かず」という諺通りの効果を上げることが可能になったと言えるだろう。

三点目は4つ切りの画用紙サイズのピクチャーカードを何枚も見せながら教科書の場面設定を確認していたのが、コンピューターでDVDやビデオクリップなどの動画を見せることにより、リアルな場面を確認させることが可能になり、生徒が内容を理解しやすくなったことなどが挙げられる。動かない教材よりも動きのある教材は生徒の視覚に大きなインパクトを与え、視覚を刺激することができ、英語学習において効果的な役割を十分に果たしていると言える。4つ切りの画用紙サイズのピクチャーカードを何枚も教室に運び、黒板に貼りながら質問をして場面を確認した後、板書するためにまたピクチャーカードを黒板から取るといった行動の繰り返しがなくても動画を一度見ただけでどんな場面で会話がされているのかが理解できるのである。

私たち人間は母国語を習わずとも話せたり、聞いて理解できるようになるのはそれをを用いる環境にいるからであり、書いたり、読んだりできるのは習うからである。第二言語の習得においても同じ事が言えるのではないだろうか。英語を書いたり、読んだり、さらに正確に話せたりするようになるために習い、運用能力を身につけさせ、向上させるためにできるだけ英語を多く用いる環境を整えることが必要である。CALL機器の活用によって確保できるようになった時間、視覚に与える効果を考えると今後、CALL機器が普通教室に必ず一台はあるという状況が当たり前になるべきだと思う。



## (2) 本単元を振り返って

本単元では3年生の文法学習の中でも最も理解が難しいと言われる関係代名詞を学習した。関係代名詞の指導は扱う度にその方法について悩むところである。つい先行詞と関係詞の関係について長々と説明してしまいがちであるが、はじめに接触節を扱い、語順の入れ替わりという点から関係代名詞に学習を進めたため、先行詞と関係詞の関係について長い説明を加えなくても比較的生徒の理解は早かったように思う。毎回の授業の最初に行う復習ではほとんど全員が正解することができた。ただ、接触節の学習の後で主格の関係代名詞を扱い、その後で目的格、最後に接触節が目的格の関係代名詞の省略という流れで学習を進めるため、接触節が関係代名詞の文の仲間であるということについて説明を加えなければスローラーナーには難しいようであった。スローラーナーにとっては接触節が語順の入れ替わりということを経験して理解できても主格、目的格の関係代名詞を学習した後では文の目的格が省略されることが理解できず、接触節は関係代名詞とは全く関係のない文としてとらえられてしまい、関係代名詞の文の理解を深めるには至らなかった。接触節を始めに扱うよりは関係代名詞を先に学習し、目的格の関係代名詞は省略できると覚えて接触節での語順の入れ替わりを学習しない方が分かりやすかったのかもしれない。接触節、関係代名詞のどちらからアプローチすればよいのかという点についてはまだまだ私自身の経験も必要であり、いずれにしてもその善し悪しをカバーできる工夫も必要であると大いに感じた。

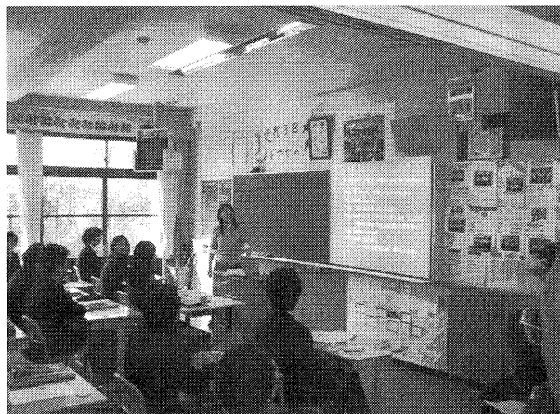
題材としては20世紀の偉人、レイチェルカーソンがとりあげられていたことから生徒の環境に対する関心や他の偉人達への興味を十分に引き出すことができたように思う。週3時間の授業から1時間増えたおかげで多用な言語活動を組み込むことが可能になり、単元末の活動で行った生徒のレポート制作に

はさらに深くレイチェルカーソンについて調べた生徒、エジソンやウォルトディズニーなど教科書で全く触れられていない人物について調べた生徒もあり、生徒の幅広い興味を知ることができた。レポートに書かれた英文についてはまだまだ指導の必要があるが、興味を持って調べ、積極的に英文を書こうとする態度は十分評価できるものであった。今後も増えた1時間の扱いを工夫し、様々な言語活動や自己表現活動に充て、生徒の英語運用能力を伸ばしていきたい。

### (3) 今後の課題

CALL機器の活用によって生徒の学習に効果が見られたことは先に述べたが、何よりも大きな効果は私自身の授業展開である。欠けた5分を確保するためにCALL機器を利用したのだが、短縮できた時間が5分どころではなかった。今まで私の授業にそれほどの無駄があったということを知り、生徒の英語を使う機会を増やすことができるようになった。板書、新出単語の確認、場面確認もすぐできるのでこれまでのように書きながら長々と説明する必要がなくなった。説明に充てられていた時間も生徒の英語を使う時間へと変わった。普段の生活の中でほとんどの生徒は授業でしか英語を使うことはない。教師ができるだけ英語を使うことは言うまでもないが、一単位の授業でできるだけ多く生徒が英語を使う時間を確保するのは何よりも大切なことである。それを実現させることができるのは私たち教師次第であり、教師が話しすぎる授業ではなく、生徒が多く英語を使う授業こそ、生徒の英語運用能力の向上が期待できる。

また、今年度から豊かな学びの手法としてどの教科でもペアやグループを用いることになったが、語学学習というのはもともと使ってこそ習得できるものであるため、本研究テーマに関わらず英語という教科では以前から用いられてきた学習方法である。しかしながら英語はペアやグループで会話をしたからといって習得できるものでないことも事実であり、根底に確かな基礎力と理解がなければ英語運用能力の向上にはつながらない。学び合いという点から見ると全てのペア又はグループで効果的な学び合いが成立していたかも疑問が残る。基礎力と理解を定着させるための学び合いを成立させるため、どの場面でどのようにペアやグループを活用するのかはまだまだ研究の必要が大いにある。音読の練習、対話練習、スピーチの練習、文法の exercise でしか使えなかったペアやグループ学習が生きる場面がどこなのか、今後も模索していきたい。



<資料1>授業スライド

今日のめあて:主格(人)の関係代名詞の形、意味を知ろう



Osamu Tezuka is a cartoonist.  
手塚治虫さんは漫画家です。  
He drew 'Astro boy'.  
彼は鉄腕アトムを描きました。

二つの文を一つにすると...

Osamu Tezuka is a cartoonist  
who drew 'Astro boy'.

直前の名詞を修飾するためにwhoが必要になる!  
whoは人を主語にしているときに使う!

今日のめあて:主格(人)の関係代名詞の形、意味を知ろう



John Lennon is the singer.  
He was a member of the Beatles.



Pele was a soccer player.  
He is called God of Soccer.



Mother Teresa is the woman.  
She helped lots of poor people.


今日のめあて:主格(人)の関係代名詞の形、意味を知ろう

Emi: Excuse me. May I ask you a question?  
Ms.Green: Sure.  
Emi: Do you know who this is?  
Ms.Green: Yes. That's Rachel Carson. She's  
the scientist who wrote *Silent Spring*.  
Emi: *Silent Spring*?  
Ms.Green: Right. It's a book about  
environmental pollution.


今日のめあて:主格(人)の関係代名詞の形、意味を知ろう

Emi: すいません。質問してもいいですか?  
Ms.Green: もちろん。  
Emi: これが誰か知っていますか?  
Ms.Green: はい。それはレイチェルカーソンです。  
彼女は*Silent Spring*を書いた科学者です。  
Emi: *Silent Spring*?  
Ms.Green: その通り。  
それは環境汚染に関する本なのよ。

今日のめあて:主格(人)の関係代名詞の形、意味を知ろう



・レイチェルカーソン  
はどんな人?  
・*Silent Spring*って  
どんな内容の本?



今日のめあて:主格(人)の関係代名詞の形、意味を知ろう



1 Natsume Soseki is the man  
who wrote 'Botchan'.



2 Hamasaki Ayumi is the singer  
who is called 'Ayu'.



3 Ishikawa Ryo is the golf  
player who is called 'Hanikami-Oji'.

\* 1 単位授業で 40 ~ 50 コマのスライドを用いている。下はフラッシュカードの一例である。

scientist

科学者

## Unit 6 Dialog

今日のめあて \_\_\_\_\_

Class name \_\_\_\_\_

<Words>

scientist ( ) \_\_\_\_\_

wrote ( ) \_\_\_\_\_

environmental ( ) \_\_\_\_\_

pollution ( ) \_\_\_\_\_

<Note>



<exercise>

John Lennon \_\_\_\_\_

Pele \_\_\_\_\_

Mother Teresa \_\_\_\_\_

<Reading Point>

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

<Answer the questions in English!>

- 1 \_\_\_\_\_
- 2 \_\_\_\_\_
- 3 \_\_\_\_\_

<今日の学習を振りかえろう>

	とてもできた	できた	あまりできなかった	できなかった
①主格(人)の関係代名詞の文の形、意味を理解することができた。	4	3	2	1
②みんなと協力してリーディングに取り組むことができた。	4	3	2	1
③59ページの話しの内容を理解することができた。	4	3	2	1